

研究概要報告書【音楽振興部門】

研究題目	小中学校教員と連携して開発する音楽科授業における ICT 機器を活用した Active Learning のモデルプラン ～IC レコーダーを「音楽の鏡」として、「気づく・感じ取る・比べる・考える・まとめる・伝える活動」により音楽的自立をめざす活動～	報告書作成者	新山王 政和
研究従事者	新山王政和(愛知教育大学:研究代表)、小瀬木崇(愛知県春日井市立勝川小学校)、河田愛子(愛知県南山大学附属小学校)		
研究目的	<p>図画工作科が自身の活動結果を目で見えて振り返りができるのに対して、時間芸術である音楽科では音楽そのものを客観的に捉えることが難しい。しかし、自らの音楽表現(歌唱、器楽、音楽づくり・創作)を冷静に受けとめる「メタ認知」や、聴き取った楽曲を留める「記憶」が不足していれば、振り返り高めていく創意工夫の活動は成立しない。これまで筆者は、ICレコーダーによって表現と鑑賞を一体化させる試行実践を重ねてきたが、今回の研究では小学校音楽科の「音楽づくり」の活動を取りあげ、ICレコーダーを活用して思考を伴った試行錯誤によって自ら創意工夫を深めていく実践を試みている。そして今回の研究では、主に次の4点の有効性の検証をめざした。</p> <p>①音楽的に自己を客観視し、自分なりの“解”に向けた課題を見つける力を養う。 [問題点の特定や課題設定の力、計画立案力(段取り力)]</p> <p>②課題解決に向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返して、自ら創意工夫を重ねることのできる力を養う。 [計画遂行力や自己実現の力(達成する力)]</p> <p>③自分なりに見出した“解”を冷静に検証し続けることのできるメタ認知の力を養う。[モニタリングやリフレクションの力(こだわる力)]</p> <p>④表現の活動は、音楽構成要素を聴き取ったり諸要素と曲想や雰囲気の変化を感受したりする鑑賞の活動と組み合わせて行う。</p> <p>これらに基づいて、小学校音楽科の「音楽づくり」の活動でも、ICレコーダーが音楽の普遍的な“よさ”(良さ、佳さ、善さ)や“うつくしさ”等の美的感覚に気付くのに有効であり、自分なりの“解”を追究する学びの本質を育むのに効果的に働くことを明らかにした。そして児童は、自らの「音楽づくり」の活動を冷静に振り返って思考を伴った試行錯誤を繰り返すことで得られる創意工夫のプロセスの大切さに気付くことができるようになり、そのプロセスを重視することこそが「再構築・構造化・更新される知識」の獲得へと繋がっていくことを提案した。</p>		

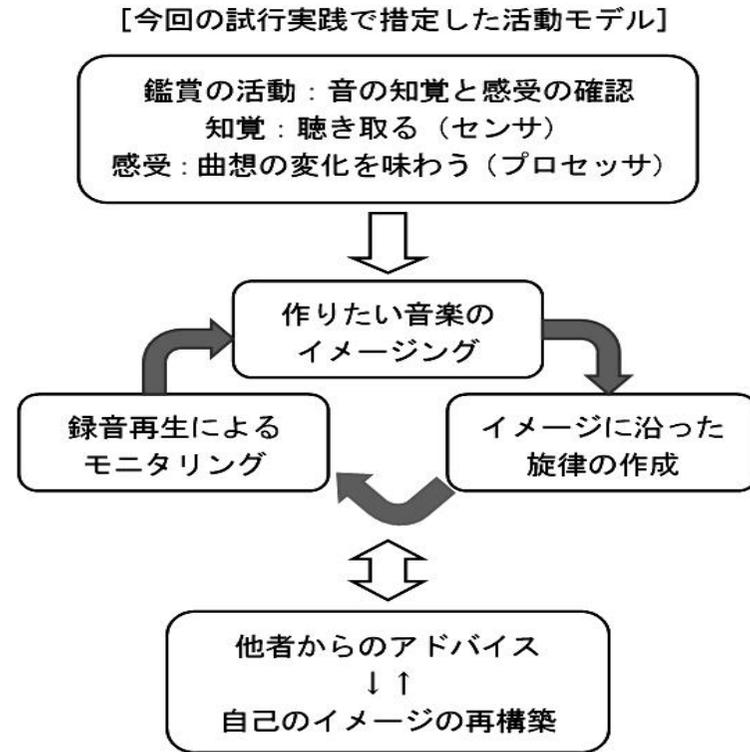
研究概要報告書【音楽振興部門】

研究内容	<p>[試行実践(研究授業)を依頼した実験校と、実践協力者]</p> <p>①愛知県春日井市立勝川小学校4年生(実践協力者:小瀬木崇教諭)</p> <p>「ソーラン節」「南部牛追い歌」「谷茶前」「島唄」の鑑賞によってリズムや旋律の特徴を感じ取らせた後、沖縄の音楽の構成音を用いて「音楽づくり」を行わせた。次に「合いの手」に合うように、リズムや旋律をさらに工夫させた。現在分析と考察を進めており、その結果は H31 年春に発行される『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』において報告する。</p> <p>②愛知県南山大学附属小学校5年生(実践協力者:河田愛子教諭)</p> <p>動物の様子や雰囲気と音の高さ・リズム・強弱の関係に注目して「動物の謝肉祭」を鑑賞した後、それらの要素を工夫して動物を表す「音楽づくり」を行った。分析と考察の結果は H31 年春に発行される『愛知教育大学研究報告』へ投稿中である。</p> <p>[試行実践(研究授業)の概要]</p> <p>①授業の手立て</p> <p>「音楽づくり」の中で、自分のイメージにつなげようと試行錯誤するためには、最初に自分がどのような旋律を作りたいかをはっきりイメージさせ、そして作る旋律を通して何を表現するのか、具体的な様子やテーマ等を明確にもたせたい。</p> <p>②主体的に「音楽づくり」をするための手立て</p> <p>児童が主体的に「音楽づくり」に取り組むようにするために、旋律を作る前に音楽の要素をどのように工夫すると自分のイメージしたことが反映されるのか考えさせておく。</p> <p>③「音楽づくり」を深めるための手立て</p> <p>「音楽づくり」の試行錯誤を深めるためには、自ら作った旋律を何度も聴き直し、自分のイメージに近づけることが大切である。そのために、IC レコーダーを活用することで自ら作った旋律を客観的に振り返らせたい。まず各自が作った旋律を IC レコーダーに録音し、それをペアの児童と聴き合い、互いにアドバイスしながら作った旋律の手直しをさせる。ペアの活動を設定することで、作った旋律に対する意見を発言する機会を増やし、自分のイメージや考えを旋律に反映させやすくする。IC レコーダーの録音を何度も聴くことを手がかりとして、グループ内やグループ同士の学び合いを促し、主体的・対話的な活動を促していく。</p> <p>* 試行実践(研究授業)で使用した IC レコーダー</p> <p>Panasonic、RR-SR30(タテ 71mm×ヨコ 110mm×厚さ 24mm、重さ約 106g)</p>
------	---

研究概要報告書【音楽振興部門】

<p>研究のポイント</p>	<p>[試行実践(研究授業)のポイント]</p> <p>①「音楽づくり」の前に鑑賞の活動を行い、音や音楽を形づくっている要素に気付き(知覚)、諸要素と曲想との関係を感じ取って味わう活動を行う(感受)。国語科で作文の前に本をたくさん読むのと同じ。</p> <p>②ICレコーダーを介在させて思考を伴った試行錯誤を積み重ねる。(作った旋律にこだわる)</p> <p>③最初に2人組のペア学習で、作った旋律を何度も聴き直ししながら創意工夫し、さらにペア2組の4人で聴き直ししながらグループ内での対話的な活動や学び合いを深めていく。(他者の価値観との対比)</p> <p>④ICレコーダーの有用性と効果的な活用方法、教師による声掛けやアドバイスの効果を検証する。</p> <p>⑤児童自らが音を出す楽器を使用し、タブレットやPCなどの並べた音符を機器が奏でてくれるものは使用しない。</p>
<p>研究結果</p>	<p>[結果のポイント]</p> <p>①機器を用いて音符並べをしながらなんとなく旋律を作るのではなく、最初に表したいイメージをもたせてから活動させる。</p> <p>②“吹いたその場で消えてしまう演奏”だけを手がかりにするのではなく、録音に残ったものを基にして工夫すると、思考を伴った試行錯誤に取り組みやすい。</p> <p>③録音再生を振り返りながら工夫するため、効率よく活動を進められる。</p> <p>④作った児童も一緒に録音再生を聴きながらアドバイスをもらうため、他者との意見交流や共有が行いやすく、分かりやすい。</p> <p>⑤最初はよいと思っていた旋律でも、録音再生を聴くことで自分が表したいイメージと異なっていると思い直す場面が多く見られたことから、児童自身のモニタリングやリフレクションに繋がっていたと思われる。この“思っていたのと違う”と自ら判断するようになった児童の変容を“成長”と捉えたい。</p> <p>⑥その場で演奏する場合だと演奏技術の問題や緊張からくるストレスがモニタリングやリフレクションを阻害してしまうことも考えられる。しかし、録音再生を活用することでこれらの問題がもたらすプレッシャーが減じるため、児童自身も安心して活動を積み上げやすくなった。</p> <p>⑦できあがった旋律の出来栄だけを総括的に評価するのではなく、録音再生を通じたモニタリングとリフレクションにより活動のプロセスを形成的に診断することができた。このように活動の途中で、取り組んでいる自身の姿を直視することができたことから、思考を伴った試行錯誤をより深めやすかったと思われる。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>今後は、さらに長い旋律を作る活動へと繋げる方策や、「音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み」(『文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽』より)を生かした「音楽づくり」の活動へと発展させる方策を検討することが求められる。さらに、今回の試行実践(研究授業)の成果を中学校へ繋げて、中学校音楽科の「創作」へと高めていく方策の模索とその検証が課題になる。</p>

[試行実践(研究授業)で測定した基本的な学習活動のモデル図]



[試行実践後に児童へ実施したアンケートの結果]

